定する方法論と比較して等閑にされてきたことは否められない事実であろう。地域における様相の相違さえも、時間差に置き換えて把握してきた可能性があることも危惧されるところである。

その当事者の一人として、反省を含めて加曾利E式土器を再度検討すると、今日の資料が増えた段階では、一括資料中に従来の見解では理解の難しい組み合わせが窺えることがわかってきた。従来の既成概念による型式観では理解し難い組成も、その出土瀕数を重ねることにより、単なる混じりと看過し得ないものであることが理解され、型式観の変更を余儀なくされてきたのである。従来は、御都合主義で単に一括遺物から省いていたものも、視点を変えて一括性を認めるところからまた新たなる展開が開けてくる場合もあるのである。

近年の県内の研究者による加曾利E式土器再検討の成果と気運に乗じて、大山遺跡出土土器を分析すると、加曾利EⅠ式終末と加曾利EⅡ式終末の問題が浮かび上がってきた。いずれも従来の細分を短縮する方向に向かっているが、前述した様に、広域編年も視野に入れて、住居跡一括出土遺物から横への変化の法則と地域性を検討した結果、論理上無理のない範囲内で認識される段階として、加曾利EⅠ終末からEⅢ式が仮に4段階に細分される見通しがついてきたことが最大の成果としてあげられよう。

この各段階は大枠で把握される段階であり、時間幅も長いものと考えられる。しかし、土器群の組み合わせや変化から現在操作概念として認識され得る時間幅であり、今後1個体1型式的な、または1要素1型式的な細分型式ではなく、各要素を満たす条件で、さらにそれらの総合的な変化の階梯が把握される段階として細分される可能性を残している。土器群に強制的な枠組みを架して限定的閉鎖的に捉えることから、一見規制的でありながらも広域かつ複雑なネットワークに支えられた開放的な範型の総合体としての側面をも持つものと認識することによって、それの展開場所である集落に対する捉え方も必然的に変わってくるものと思われる。近年の人口移動論等に導かれた集落論の批判的継承を受けつつ縄文時代集落観が変わることは、その延長上に縄文時代史像及び時代史観の変更が余儀なくされおり、「発見の考古学」によってのみ縄文時代史観の変更が迫られるのではないことを明らかにしていくものと思われる。

3．加曾利EⅡ式土器細分の再検討

大山遺跡の住居跡出土土器を中心にして集落の分析を行った結果、加曾利EⅠ式終末からEⅢ式に至るまでに4段階の変遷が想定された。この4段階が連続したものと捉えるか、断続するものと捉えるか、または、断続しながらもさらに細かな段階に区分されると捉えるかは見解の異なるところであろう。1982年の大山遺跡第6次の報告（金子1982）では、連続的にさらに細かい段階として把握しており、その結果、同時期とされる住居跡数を少なく認定してきた経緯がある。その基準は1982年に等事業団の紀要で発表された「縄文中期土器群の再編」案に準じて設定したものであったが、1996年の現在では前述した様に、出土土器群の組み合わせ等からその編年案は再検討の時期に来ていることは間違いない。

筆者は再編案の際に加曾利EⅡ式に対応するXⅠ（EⅡ古）、XⅡa（EⅡ中）、XⅡb（EⅡ新）の段階を担当した。実質上、加曾利EⅡ式を3段階に区分し、連弧文土器に基準を置き、加曾利E式のキャリパー系土器群の変遷と連弧文土器との関連から、モチーフの崩れる方向性を段階的に把握したものであった。簡単にその基準を述べると、

EⅡ古段階…連弧文土器が成立する段階で、キャリパー系土器では縄文の施される頸部無文帯が残存する等の加曾利EⅠ式新段階の要素が残存し、磨消懸垂文が成立していない段階。

EⅡ中段階…連弧文土器が盛行し、キャリパー系の

土器群が衰退する段階で、胴部懸垂文に磨消懸垂文が成立する段階。

ＥⅡ新段階…連弧文土器が急速に衰退して、キャリパー系土器群が盛行し、口縁部文様帯を喪失する土器群が成立する段階。

となろう。ＥⅡ古段階におけるキャリパー系土器は加曾利ＥⅠ式新段階と連続的でその区分が不明瞭であった。その点については谷井彪氏が、大山遺跡出土土器群を題材として加曾利ＥⅠ式直後の土器群について論じている（谷井1979）。

谷井氏は頸部無文帯の最後の段階から、磨消懸垂文が生じる間に、地文が施文される等の変容された頸部無文帯が残存しながら、磨消懸垂文の成立しない段階を抽出して、加曾利ＥⅠ式とＥⅡ式の中間的なＥⅠ式直後の段階とした。この段階が実質的に加曾利ＥⅡ式古段階とされて、この段階に連弧文土器が成立するものとの考えを示した。この谷井氏の見解は、笹森謙一氏による島之上遺跡の加曾利ＥⅡ式土器３細分の研究成果（笹森1977）が背景にあり、笹森氏の示した加曾利ＥⅡ式古段階の様相より、若干古い様相を持つ段階として加曾利ＥⅠ式直後の段階を設定したものであったが、基本的には連弧文土器が共伴するという認識からＥⅡ式古段階という枠組みで捉えられていたものと思われる。笹森、谷井両氏とも連弧文土器の出現を以て、加曾利ＥⅠ式からの分離、つまりＥⅡ式の成立と把握しており、筆者も「縄文中期土器群の再編」（金子1982）や大山遺跡の第６次の報告（金子1982）では加曾利ＥⅡ式土器を同様の基準で分類した。

しかし、今回、再度大山遺跡出土土器を検討するに当たって、加曾利ＥⅠ式終末と谷井氏の指摘したＥⅠ式直後の段階と連弧文出現期（ＥⅡ古）の土器群の様相に混乱をきたしていることに気付いた。つまり、谷井氏の指摘したＥⅠ式直後の土器群と連弧文土器は、大山遺跡においては実は共伴関係が認められなかったのである。むしろ、連弧文土器さえ含めなければ、大宮台地における連弧文土器出現前段階の土器群の様相を的確に指摘していたのであった。

連弧文土器が伴出したＡ区第６号住出土土器は、谷井氏がＥⅠ式直後に置いたＡ区第１号住、第２号住、第８号住より後出的であり、特にＡ区第６号住１がＡ区第８号住１より明らかに後出的であることは先にも述べたと通りである。また、第６次第３号住出土土器は、笹森氏がＥⅡ古段階に位置付けた島之上遺跡第３号住に極めて類似した内容を保有している。筆者が大山遺跡第６次の報告で、ＥⅠ式終末～ＥⅡ式初頭段階、ＥⅡ式古段階を設定して住居跡を分けたのもこの理由からであった。その際、連弧文土器を伴うＡ区第６号住をＥⅠ式末～ＥⅡ式初頭に誤って位置付けたのは連弧文土器が比較的古相を帯ていたからであった。今回改めて検討すると、第６次第３号住と同段階に位置付けられることは明らかであり、連弧文土器が盛行する段階に改めて位置付け直して置きたい。

それでは、何を以てこの時期を区分すれば良いのかが問われてくる。最も明瞭なのは、連弧文土器の出現を以て区分することである。しかし、連弧文土器の成立段階も各研究者によって意見の異なるところであり、見解の一致を見ない。桐生直彦氏（桐生1981）は東京編年（安孫子・秋山1980）の第Ⅲ期（ＥⅠ終末に相当）に、安孫子昭二・秋山道生両氏は第Ⅳ期（ＥⅡ古に相当）に成立する考えを示した。東京編年の第Ⅲ期と第Ⅳ期の内容は我々の考える内容と若干異なるが、埼玉県で連弧文土器が出現する段階はおよそ東京編年の第Ⅳ期に当たり、谷井氏が指摘したＥⅠ式直後の段階は第Ⅲ期内に包括される。埼玉県が連弧文土器の発生の地ではないとしても、加曾利ＥⅡ式段階になってから連弧文土器が成立することは明白である。

谷井氏はＥⅠ式直後の段階を、「ＥⅠ式後葉の土器群と比べてみると、土器全体の基本的組み合わせのあり方は新たに出現した連弧文系土器を除くとほとんど変化がない」と述べているが、連弧文土器がこの段階に存在しないとすると、ＥⅠ式直後の段階はＥⅠ式後葉の土器群の変化を指摘したことになる。

この変化が時間的に縦の変化であるのか、先に指摘した様に空間的な横の変化であるのかが問題となる。

結論的に言えば、空間的な横の変化である可能性が高いことを指摘できよう。従来、時間的変化として捉えていたことから、相模から多摩にかけての地方で成立したとされる連弧文土器が、やや時間的経過を経て周辺へと拡散したとする考え方が生じて来たのであろう。ＥＩ式終末に位置付けられる成立期の土器群が、その地域に存在していることがその考え方を示していよう。ＥＩ式終末と認定された根拠は、頸部無文帯を持つキャリパー系土器が存在することに他ならない。

縄文土器の広域編年を思考するとき、一つの要素の現れについてそれを定点と成し、ホライズンを形成しその平行関係を想定することは常套手段であり、それが１型式もずれることは考え難いことである。成立地域の連弧文土器を含む土器群が、大宮台地の連弧文出現期の土器群と同様に新しい段階（ＥⅡ式）であるのか、逆に大宮台地の土器群が古い段階（ＥＩ新）であるのかの何れかであるにしても、ほぼ同時に成立していると見做すことが型式学的研究の必要条件であろう。発掘数が増えた段階で、大宮台地において従来のＥＩ式新段階の連弧文土器が未検出であるとは言い難い。事実、伊奈町原遺跡（村田1996）では、連弧文土器とともに隆帯渦巻の繋ぎ弧文の口縁部文様帯を持ち、頸部無文帯の残るキャリーパー系土器が出土している。大山遺跡例等と連弧文土器を比較してみても、時間差は感じられない。ここで、また両者の共伴関係に矛盾が生じることになる。頸部無文帯を持つ土器が連弧文土器段階にまで残存していると解釈せざるを得ない。または、混じりと解釈するかの何れかである。多摩地域においても、状況は同様である。

加曽利Ｅ式系のキャリパー系土器は、ＥＩ式では口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯で構成され、ＥⅡ式で頸部無文帯が消滅し、胴部に磨消懸垂文を持つことがメルクマールとして認識されてきた。その中間的な様相は、笹森氏に依って抽出されてＥⅡ式古段階として設定された。谷井氏は連弧文土器の判定を除けば、大宮台地における笹森氏が抽出したＥⅡ式古段階以前の、ＥＩ式の変化の延長上にある最新段階の様相を抽出したのであった。

西関東地方におけるＥＩ式直後の段階の土器群は、椚田遺跡第８号住（新藤1976）、二宮遺跡第８号住（紀野1978）が代表的な遺跡として挙げられる。この段階では、口縁部文様帯に渦巻文主導型のモチーフ、楕円区画文と渦巻文の集約された組み合わせモチーフが存在し、特に後者のモチーフを持つ土器では頸部無文帯を消失するタイプが現れるのを特等とする。そして、籠目文土器等に代表される所謂曽利Ⅱ式が伴出し、連弧文土器が存在していないことを特徴として押さえられる。

大宮台地と比較すると、やや古い様相が看取されるが、椚田遺跡第８号住では頸部無文帯内に縄文を施文する土器や、頸部区画線が下に下がり頸部無文帯の幅が広がるものや、逆に狭くなるものが出現する等、大宮台地と同様相を呈し、加曽利ＥＩ式の質的な変化が現れている。また、頸部無文帯を消失する土器では、楕円区画文と渦巻文のモチーフが、大山遺跡第６次第３号住や島之上遺跡第３号住出土器と非常に近似している。従って、椚田遺跡第８号住を代表とする段階が、谷井氏の指摘したＥＩ式直後の段階に対比されることは明かとなろう。

この様に、連弧文土器ホライズンを設定することによって、連弧文土器を伴うことが確実と思われる頸部無文帯を持つキャリパー系土器は、ＥⅡ式古段階にまで下げて考え直す必要があり、ＥＩ式の要素が残存したものとして解釈される根拠を持つのである。頸部無文帯が加曽利ＥⅡ式にまで残存し、特にＥⅡ式中段階にまで存在することは、笹森氏が既に島之上遺跡第16号土壙出土土器で指摘している（笹森1977）。頸部無文帯に拘るのであれば、大木８ｂ式や９式の影響を受けた加曽利ＥⅢ式のキャリパー系土器にも、口縁部文様帯と胴部文様帯の間に明瞭に頸部無文帯が存在している事実がある。従って、頸部無文帯の有無では傾向は捉えられても、基準になりえないことが明瞭となる。

連弧文土器ホライズンで周辺地域の土器群を比較してみると、曽利式に於ける連弧文土器出現期の様相が

注目される。連弧文土器は、柳坪遺跡（末木1975）出土土器の様な胴部が括れて区画され、口縁部に繋ぎ弧文が巡り頸部に縦の分割線が入る咲畑系とされる土器の分帯や文様構成を基本スタイルとして成立したものと考えられてきた。最も古いとされる連弧文土器は、このスタイルと文様構成を採り、加曾利ＥＩ式終末段階に位置付けられてきたが、曾利式と伴う連弧文土器は、関東の土器群に先んじて古く位置付けられるものはないものと思われる。それは、伴出する加曾利系曾利Ⅲａ式の文様や文様構成の崩れ度合いが、ＥＩ終末段階にまで遡るものがないことに起因する。山形真理子氏が、関東との比較においては問題を残すものの、連弧文出現段階を以て曾利を古式と新式に区分するのは妥当性のあるものと思われる（山形1996）。頸部無文帯の有無のみでは、前述した様に加曾利ＥＩ式段階に比定される根拠とはならない。ここでは詳細な説明は加えられないが、曾利式内においても連弧文土器はＥⅡ式古段階以降の枠内に納まるものと思われ、連弧文土器ホライズンの有効性が認められよう。

また、大木式においては、中ノ内Ｂ遺跡（伊藤1987）第１号土壙出土土器に、頸部無文帯を持ち連弧文を施文する大木８ｂ式土器が出土している。水沢教子氏は大木８ｂ式の新段階に位置付けているが（水沢1996）、共伴する土器の胴部渦巻文や口縁部文様帯を比較すると、加曾利ＥⅡ式古段階に位置付けられものと思われ、やはり、連弧文土器ホライズンは有効であることが理解される。

各地の土器群との比較において明らかな様に、連弧文土器出現期をＥＩ式終末にとらえる見解は、頸部無文帯の存在が大きな理由になっているようであり、その要素を除いて、共伴する土器群の総体的な要素比較を行うと加曾利ＥⅡ式古段階に対比される要素の多いことが明かとなろう。従って、連綿と継承する要素群の中から、連弧文土器ホライズンをもって土器群の画期を捉えることが最も有効的であると思われる。

加曾利ＥⅡ式古段階はＥＩ式に後続する段階であるが、大山遺跡第６次３号住や、島之上遺跡第３号住出土土器を詳細に検討すると、口縁部文様帯のモチーフ構成はＥＩ式直後段階に直結する要素を持つが、胴部地文に複節縄文を施文したり、条線のみの土器が成立していたり、連弧文系の土器では胴部懸垂文の上端が曾利Ⅳ式の様に連結した描線を採用した土器群が成立している。従来考えていた位置付けよりかなり新しい要素が垣間見られ、従来のＥⅡ式中段階的な位置付けが考えられる。しかし、明瞭な磨消懸垂文は出現しておらず、磨消懸垂文自体がかなり後出の要素であることが理解される。従って、次の画期は、明瞭な磨消懸垂文の出現に求められる。

磨消懸垂文こそが、加曾利ＥⅡ式の最も典型的なメルクマールであったが、現在の土器群の組み合わせからは、加曾利ＥⅢ式との過渡期的な要素であることが明かとなっている。磨消懸垂文が施文される土器は、口縁部の渦巻文と区画文の構成がやや集約化されていたり、４単位の小突起が付く波状口縁を呈するものが出現したりしている。また、胴部磨消懸垂文の上端が連結したり、口縁部文様帯を消失するものが出現したり、前段階とは様相を異にする。中にはＨ状やＵ字状の磨消懸垂文を施文するものさえも共伴する様になる。連弧文土器では、２本沈線文描出や、２本沈線文間を磨り消す手法が採用される。磨消縄文手法の出現と共に、文様構成及びモチーフに画期的な変化が現れる。先の編年では加曾利ＥⅡ式新段階と把握していた段階であるが、ＥⅢ式古段階との明瞭な区分が難しい段階である。しかし、連弧文土器の変化形態としての所謂吉井城山類は、基本的には伴わない段階として認識される。

そして、次の段階に吉井城山類が出現し、口縁部文様帯を持つキャリパー系土器が残存する段階を迎える。この段階の口縁部文様帯のモチーフは、渦巻文と区画文が流れて重層的に入り組む構成を採るもの、渦巻文が波頂部で楕円区画文化するもの、楕円区画文のみの組み合わせになるもの等、ＥⅡ式初頭段階からのそれぞれの系譜で集約及び簡略的に変化してきた構成となっており、所謂、加曾利ＥⅢ式の段階のモチーフ

である。

加曽利EⅢ式は谷井彪・細田勝両氏によって大木9a・9b式に合わせられて、古新の段階に2細分された（谷井・細田1995）。そして、加曽利EⅣ式は時間幅としての存在が比定され、EⅢ式新段階に組み込まれて位置付けられた。しかし、口縁部文様帯を持つキャリパー系の土器群は古新の両段階に確実に存在しており、吉井城山類と合わせて両段階に区分することは大変難しい状況を呈している。また、EⅣ式になってから存在が知られていた柄鏡形住居跡は、北本市提灯木山遺跡（磯野1996）ではEⅢ式古段階の土器群を伴っており、従来のEⅢ式古段階では既に成立していた様である。加曽利EⅣ式がEⅢ式新段階に編入されたとしても、口縁部文様帯の残存傾向や、柄鏡形住居跡の存在等共通する要素が多く区分することが難しいことを考慮すると、両氏のEⅢ式の古新細分案にはまだ再考の余地が残されているものと思われる。

以上、加曽利EⅡ式土器を中心として前後の土器群について、今日的な区分論を展開してきたが、確たる基準もなく流動的であるのが現状である。いつの時期でも同様であるが、多系統で複数要素の集合体である土器群を明瞭に区分することは殆ど不可能に近い。住居跡出土一括遺物から認識される時間幅を一つの単位とし、多くのクロスチェックを経て認識される段階幅を設定することが基本となる段階認識である以上、要素の錯綜と一定の時間幅を有することは前提条件である。そこにある錯綜したと認定される状況こそが、実態なのであろう。

最後に、いままで述べてきた各段階を要約すると、

第1段階…加曽利EⅠ式直後段階で、頸部無文帯の消失する加曽利EⅡ式的なキャリパー系土器が出現する段階。所謂曽利Ⅱ式が伴い、連弧文土器が出現しない段階。

第2段階…加曽利EⅡ式段階で連弧文土器が成立し、曽利Ⅲ式が伴う段階。頸部無文帯が残存し、磨消懸垂文が出現しない段階。

第3段階…加曽利EⅡ式終末からEⅢ式初頭段階で、胴部に磨消懸垂文が成立する段階。連弧文の変化段階の土器群が伴い、口縁部文様帯を消失する土器が出現する段階。

第4段階…加曽利EⅢ式段階で吉井城山類、梶山類が出現する段階。口縁部文様帯を持つキャリパー系土器が主体的に残存し、従来の加曽利EⅢ式新段階、EⅣ式古段階の土器群が含まれる段階。

となる。

これ等の段階の詳細は別の機会に検討するとして、今回は最小限度の区分の提示とその意義付けを行って置きたい。

第1段階では口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯を持つキャリパー系土器に、頸部無文帯の消失する土器が出現することに大きな意義を見い出せる。それは、加曽利EⅠ式終末において連弧文土器の生成に向けて構造的な変化が現れてきたことを示すからである。頸部無文帯の消失はEⅠ式初頭以来の東部関東的な2文様帯構成の系統要素が、広く西部関東地方の土器群に影響を与えることから生じるものと思われる。裏腹に文様帯構成の弛緩が、連弧文土器を成立させる構造的変革をEⅠ式の3文様帯系の土器群の中に生じさせたものと認識されるからである。従って、従来ではEⅠ式の枠組み内で捉えられていたが、EⅡ式への連続性を考慮し、EⅠ式土器の構造的な変革を評価して、土器群の把握としてEⅡ式の枠で捉えその古段階と認識して置きたい。

また、第3段階の確実な磨消懸垂文が現れる段階は、磨消縄文手法の成立と共に懸垂文間の連結、曲線化が進められ、また、連弧文土器の描出手法にも影響をあたえ、組み合わさる土器群にEⅢ式的な要素の萌芽が認められることから、やはり土器群としての把握からEⅢ式の古段階として認識して置きたい。つまり、

第1段階…加曽利EⅡ式古段階

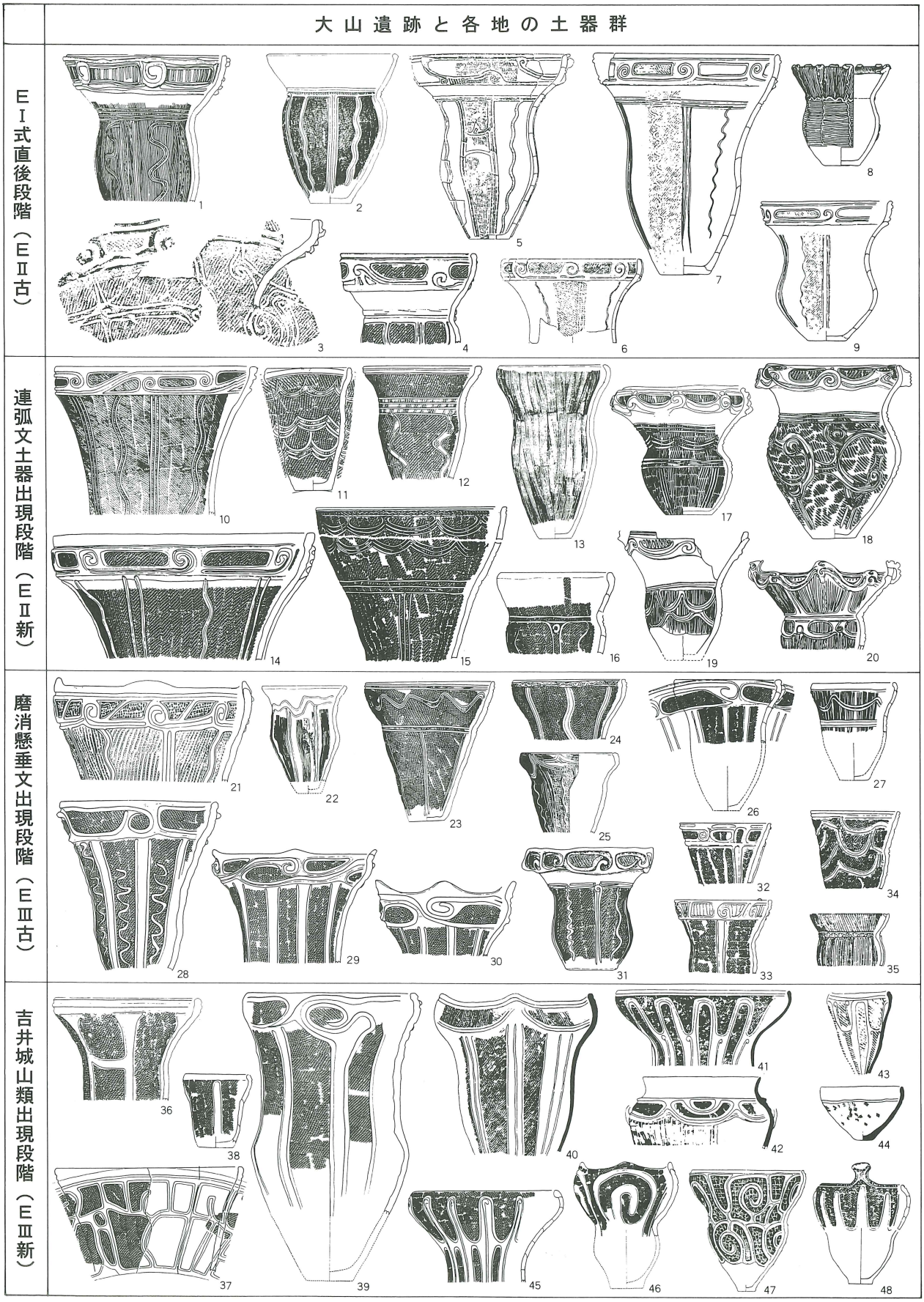
第2段階…加曽利EⅡ式新段階

第3段階…加曽利EⅢ式古段階

第4段階…加曽利EⅢ式新段階

となる。何れにしても、従来の型式観や呼称とは多少

第19図　加曾利ＥⅡ・Ⅲ式土器段階別変遷図



ずれるものとなるが、呼称は別としても、組み合わさる土器群の要素で区分すると以上の４段階が妥当と思われる。

しかし、その際に従来新旧の時間差で捉えられていた土器群を、横の変化である地域差に置き換えて把握していかなければならず、実際その方向での実践は途に就いたばかりである。流動的である所以であるが、今後その方向の検証に力を注いでいきたいと考えている。人間の行動の所産である以上、複雑で錯綜している状況こそが実態であると認識するところから、要素間の紐解きを行い、我々の認識し得る仮説としての時間幅と画期を模索していきたいと考えている。

＜参考文献＞

青木秀雄　1979「風早遺跡」庄和町風早遺跡調査会

安孫子昭二・秋山道生　1980「縄文時代中期後半の諸問題　土器資料集成図集」『神奈川考古』第10号

伊藤　裕　1987「中ノ内Ｂ遺跡－東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅱ－」

磯野治司　1996「提灯木山遺跡第２次調査」北本市遺跡調査会報告書第２集

金子直行　1982「大山」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第17集

紀野自由　1978「二宮」秋川市文化財調査報告書５

桐生直彦　1981「連弧文土器」『縄文文化の研究』４

笹森健一　1976「志久遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第31集

笹森健一　1977「前畑・島之上・出口・芝山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集

白石浩之　1977「当麻遺跡・上依知遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告書第12集

新藤康夫　1976「椚田遺跡群　1975年度調査概報」

末木　健　1975「山梨県中央道報告書－北巨摩郡長坂・明野・韮崎地区内－」

谷井　彪　1973「坂東山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第２集

谷井　彪　1974「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集

谷井　彪　1979「大山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集

谷井　彪　1979「加曽利ＥⅡ式土器の覚書」『埼玉県立博物館紀要５』

谷井　彪・金子直行他　1982「縄文中期土器群の再編」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団紀要紀要1982』

谷井　彪・細田　勝　1996「関東の大木式・東北の加曽利Ｅ式土器」『日本考古学』第２号

水沢教子　1996「大木８ｂ式の変容（上）－東北、越後、そして信州へ－」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ

村田章人　1996「原／谷畑」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集

山形真理子　1996「曽利式土器の研究－内的展開と外的交渉のの歴史－（上）」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第14号

第19図出典

１－大山Ａ区１住、２－大山Ａ区２住、３－大山Ａ区８住、４－坂東山16住、５～６－二宮３住、７～９－椚田８住、10～13－大山６次３住、14～16－島之上３住、17～18－中ノ内Ｂ１土壙、19－当麻22住、20－柳坪Ａ２住、21～22－大山Ａ区10住、23～25－大山Ａ区３住、26～27－志久10住、28～30－花影９住、31－島之上16土壙、32～35－坂東山27住、36－大山Ａ区４住、37－大山Ａ区７住、38～39・45－志久４土壙、40～44－馬込12住、46－志久５土壙、47－風早埋甕、48－島之上４住